

## コロナ禍20人に減った団員が結束 本番は49人、荒谷俊治氏追悼演奏会開催

東京コールフェライン・指揮者 宮崎 誠二

10月15日、東京紀尾井ホールにて、東京コールフェラインの第35回定期演奏会を開催しました。同団は、指揮者として活躍された荒谷俊治氏のもとに集まった団員により1981年に結成され、荒谷氏とともに歩んできた合唱団です。

2020年の1月荒谷氏が逝去、その後計画された追悼演奏会は、コロナ禍により2度の延期を余儀なくされました。

1年半に及び中断の後、再開直後は練習参加者が20名に満たない時期が長く続き、演奏会の開催自体が危ぶまれていました。しかし、徐々に活動の輪が広がり、最終的に49名の参加者を得て、追悼演奏会を実現することができました。

演奏会を迎える喜びを団長の光瀬靖彦氏が、プログラムに次のように書かれています。

「先生にご指導いただいた40年の間には、日本や世界の素晴らしい合唱曲に出会うことができましたし、日本を代表する多くの声楽家や演奏家とご一緒する機会をつくっていただきました。… よほどのご事情がない限り練習を休まれることはありませんでした。練習が終わると、近く中華料理店などで冷たいビールを飲んでからおかえりになるのが常でした。飲み代は要りませんと申し上げても、「それではオレと一緒に飲めない」と必ず支払いをされました。… 本日先生がとてもお好きだった紀尾井ホールで、ようやくその日を迎えられることをうれしく思っております。」

演奏会では、第一ステージでは、荒谷氏が生前取り上げたいとおっしゃっていたプッチーニの「グローリア・ミサ」を、第二・第三ステージには、荒谷俊治氏と親交の深かった松岡 究<sup>はかる</sup>氏を客演指揮に招き、荒谷俊治が自身で編曲した東欧民謡と高田三郎「水のいのち」を追悼の演目として取り上げました。

演奏会では、東京コールフェラインピアニストとして長年荒谷氏を支えてきた佐藤規子<sup>のりこ</sup>をはじめ、第一ステージでは荒谷氏最後の演奏となった第34回定期演奏会でも共演したテノールの中嶋克彦<sup>か</sup>、バリトンの加未徹<sup>か</sup>、エレクトーンの小倉里恵<sup>りえ</sup>の皆さんに花を添えて頂きました。

### 50人以下はマスク不要 紀尾井ホール

紀尾井ホールでは、コロナ禍のガイドラインに基づき合唱団50人以下であればマスクを外して歌うことが許容されており、久しぶりにマスクを外しての歌唱に、団員の気持ちも一つになり、盛

会のうちに3年ぶりの演奏会を行うことができました。

また、プログラムには多くの懐かしい写真が収められ、会場では、若き日の荒谷氏の姿を収めたスナップの展示も行われ、在りし日の先生を偲びました。

ようやく一つの区切りとなる演奏会を3年越しで開催することができ、安堵するとともに、団員一同歌う喜びを噛みしめています。荒谷氏とともに歩んできた東京コールフェラインは、これからも、良き音楽を歌い継いでいきたいと思っております。



### 宮崎 誠二 プロフィール

九州大学経済学部卒。在学中、九州大学男声合唱団コールアカデミーにて、同団出身の指揮者・荒谷俊治氏、作曲家・藤井凡大氏より指導を受ける。

2004年11月より同団の副指揮者に就任。荒谷俊治を支える

とともにエリック・ウィテカーや千原英喜など新しいレパートリーを取り上げてきた。荒谷俊治逝去後、同団指揮者に就任。男声合唱団TAG、合唱団わくおん指揮者。日本合唱指揮者協会会員。



### 〔編集者よりひとこと〕

東京コールフェラインは、1981年、故荒谷俊治氏のもと創設された合唱団です。パレストリーナ、バッハ、ヘンデル、モーツァルト、シューベルト、ブラームス、ブリテンはじめ、オペラ合唱曲、現代邦人曲、日本叙情歌など幅広いレパートリーを歌っています。

2019年9月、「荒谷俊治 卒寿・指揮者生活60周年記念演奏会」のヴェルディ「レクイエム」が最後の演奏会となりました。荒谷氏は2020年1月1日に逝去されました。

2010年11月28日、「第1回全日本男声合唱フェスティバルinみやぎ」において合同演奏曲、グノーの「Mass No.2 in G (第二ミサ)」を荒谷俊治氏の指導・指揮で歌う機会がありました。宮崎県立芸術劇場アイザックスターンホールの華麗で重厚なオルガンとともに歌った壮大なミサは今でも心に残っています。